



再思「先住民？」—— 愛伊努族的名稱

「先住民」再考—アイヌ族の名称

Rethinking the Term, "Sienjumin": The Name of Ainu

林江義 行政院原住民族委員會 主任秘書
尾原仁美 翻譯

20年前，在台灣省政府服務期間，曾獲甄選赴日做專題研究。在東京進修期間，學校曾詢問我有無意願到北海道long stay以體驗北國農莊生活。當時因早有訪視行程乃不克前往。回國後，一直深覺惋惜。幾年後時移勢異，2005年8月，再次有機會獲北海道Utari協會邀請參加在道央平取町「二風谷」，所召開的國際會議，此行可謂得嘗夙願，彌補了多年未能一窺北海道遼闊大地、壯麗美景的遺憾。

本次會議的主題係探討國際少數民族的基本人權，我個人獲邀是希望會中能代表台灣政府，針對我國甫經立法院通過總統公布施行的「原住民族基本法」做專題報告。以往出國參加國際會議，是以取經為主甚少有上台報告的機會。唯此次意外在國外報告國內重要法案之立法歷程與主要內涵，是一個既新鮮又興奮的經驗，加上好友潘紀揚君鼎力相

20年前台灣省政府に勤めていた頃、日本での研究の推薦を受けたことがある。東京で勉強している時、北海道にロングステイして北国の農村生活を体験してみないかと学校に聞かれたが、当時はすでに他の視察の予定が組まれており、行くことは適わなかった。帰国した後も、そのことをずっと残念だと思っていた。それから数年後の2005年8月、北海道アイヌ協会から道央平取町「二風谷」で開催される国際会議へ招待される機会があり、ようやく願いがかなって、北海道の広々とした大地の、壮麗な美景を見ることができなかつた長年の遺憾を解消することができたのだった。

その会議のテーマは世界の少数民族の基本的人権で、私が招待されたのは、台湾政府を代表し、立法院で可決され総統により公布施行された「原住民族基本法」について報告することを期待されていたためであった。普段、国外に出て国際会議に参加する際、どちらかと言うと知識の吸収が主で、報告する機会は少ない。意外にも、国内の重要法案立法の経緯と主要な内容を国外で報告できることになり、それは新鮮で興奮する経験であった。友人潘紀揚君の助けを借り、発表の前日、徹夜で講演稿の

助，前一晚連夜將講稿完成英文譯本，使次日研討會專題報告得以圓滿順利。

在三天的會議中，我們幾位台灣原住民族的代表，始終對於北海道愛伊努民族自稱為「先住民」大惑不解。根據北海道發展的歷史，在日本本州的大和民族入侵北海道之前，愛伊努民族就「原住」於此，並且創立了獨自的文化，而愛伊努文化據說是以在此之前的擦文文化為主體，同時受到本州和東北亞地區的影響而建立的。從12世紀末左右開始，大和民族集團式地渡海來到北海道南部，遂演變成外來民族與原住民族對立衝突的局面，最終仍被強勢的外來民族所統一。這一幕民族大遷徙的歷史與競逐，相較台灣原住民在17世紀，面對大陸渡台先民競相渡海來台時所遭到的悲苦命運幾乎如出一轍。唯一不同的是，當台灣原住民族被次第據台殖民政府稱為「番」、「高砂族」或「山胞」時，清楚瞭解到這是一個外來民族充滿歧視、貶抑、侮辱所賦予原住民族的稱呼。也激起台灣原住民族在20世紀末發動了長達10年大規模的正名運動，甚至原住民菁英有人為此入獄服刑，最終於1994年才一舉掃除「山胞」，正名為「原住民」——一個原住民族共同打拚爭取的名字。在異國再次面對被稱為「先住民」的愛伊努族，彷彿回時光隧道，見到一個力主單一民族的組合才能打造世上最優秀的國家，把當地原住民族硬是直呼

英語版を完成させ、日本でのシンポジウムのテーマ報告を円満に行うことができた。

三日間の会議中、我々台湾原住民族の代表者は、北海道アイヌ民族が「先住民」と自称していることにずっと疑問を感じていた。北海道発展の歴史では、本州の大和民族が北海道に侵入する以前から、アイヌ民族はそこに「原住」しており、独自の文化を創っていた。アイヌ文化は擦文文化を主体とし、本州と東北アジア地域の影響を受けてできたという。12世紀末頃より、大和民族は集団で北海道南部に渡ってきて、外来民族と原住民族間の衝突という局面に至り、ついには優勢であった外来民族によって統一された。この民族大移動の歴史と競合は、17世紀に台湾原住民と大陸から渡台した漢人との間に起きた命運とほとんど轍を同じくする。唯一異なるのは、台湾原住民が次第に殖民政府によって「番」、「高砂族」、「山胞」と呼ばれるようになったとき、そこには明らかに外来民族の原住民族に対する差別、蔑視、侮辱が込められていた。そのことは20世紀末の台湾原住民族が発動した、10年にわたる大規模な正名運動につながり、そのために投獄された原住民族エリートまで出ることとなった。1994年にはついに「山胞」を一掃し、「原住民」という正式な名称を、原住民族は共に勝ち取ることができたのである。しかし、異国で「先住民」と称されるアイヌ族に再び向き合ったとき、まるでタイムトンネルを遡るような気持ちになった。単一民族を極力主張することで成し遂げられた世界で最も優秀な国家が、当地の原住民族を「先住民」と呼んでいる荒唐無稽と傲慢。アイヌ族の人たちはこの呼称に対し、運命だから仕方ないというような表情は、かつての台湾原住民と酷似している。今後、北海道の「原住民族」の名称を勝ち取るとは、長い長い血と涙が混じる苦闘の道のりとなることだろう。

為「先住民」的荒謬與傲慢。愛伊努族人對此稱呼臉上無奈認命的寫照，像極台灣原住民當年的圖像。日後，要爭取為北海道「原住民族」，將是一個漫漫長路混著血淚交織的苦鬥。

其次，北海道與台灣，基於地理位置相距遙遠，似無雷同或關連之處，唯一的共同經驗是二地都曾日本的殖民地。北海道於1869年明治政府時設置了開拓使，正式開始了對內地的開發。台灣是1895年淪為日本殖民地並設總督府，開始殖民統治。歷經百年後的今天，再觀二地原住民族的整體發展，誠有何祇萬里之別。特別是近10年來，台灣原住民族整體發展的快速，不論在法制建構、社會發展、部落重建、教育文化等等面向，有逐漸成熟穩定的態樣。因此，本次國際會議愛伊努族期待聽取實際從事台灣原住民族事務的工作人員來分享經驗。直言之，台灣原住民族政策的大躍進，關鍵有三大基石；憲法保障、國會議員及中央原住民族事務專責機關。析論之，由於國家根本大法自1992年起即已明定有保障原住民族基本權利條文，開啟了日後原住民族權利邁向法制化，擺脫了長期以行政命令隨政府好惡，政策存廢無常的隱憂。國會保障原住民的當選名額，搭起了原住民立法委員問



2005年在二風谷舉辦的世界原住民族會議所出版的論文集。

北海道と台湾は、地理的な位置はかなり遠く、共通点や関連など何もないように見えるが、どちらもかつて日

本の植民地であったことが共通している。北海道は1869年に明治政府が開拓使を置き、正式に開発が始められた。台湾は1895年に日本の植民地となり、総督府が置かれて、殖民統治が開始された。百年後の今日、この二つの地域における原住民族の全体的發展を見ると、万里の隔たりを感じる。特にこの十年来、台湾原住民族全体の發展は速く、法律整備、社会發展、部落再建、教育文化など各方面において、次第に成熟かつ安定した状況になってきている。そのため、今回の国際会議ではアイヌ族が、台湾原住民族の事務に実際に従事している私たちの話を聞いて、経験を分かち合うことを期待していたのだった。率直に言えば、台湾原住民族政策の大躍進には、鍵となる基礎が三つある。憲法保障、国會議員、および、中央の原住民族事務専門機関である。解説すると、1992年憲法に原住民族の基本権利を保障した条文が盛り込まれて以来、原住民族の権利の法制化が始まり、時の政府の良し悪しにより政策の存廃が左右されることがなくなった。国会は原住民議員の当選枠を保障し、原住民の立法委員が政治、立法の舞台で活躍し始めた。権利は自分で勝ち取らねばならない今日、原住民立法委員は原住民族權益獲得の尖兵となり、日々精進して少しづ

政、立法的舞台，在權利要靠自己爭取的今日，原住民立法委員扮演爭取原住民族權益的尖兵，日日精進，逐步建構優惠的網路。在中央設立原住民族專責機關後，即編有預算及人力，推動各項中長程發展計畫，全面提升社會發展。這三大基石交相作用，成了台灣原住民族政策大幅跨步向前的推手。相較北海道愛伊努族被日本稱為「先住民」的默默承受，有心喚起族人自我認同意識也難。又日本長久以來根深柢固崇尚單一民族國家的迷思，促其國內特別立法保障，增置國會議員席次或設中央專責機關，以現階段而言，無一不困難重重。

帶著「先住民？」——愛伊努民族名稱的疑雲，完成這趟國際會議。回國後一段很長的時間，腦海中時刻浮現，他們下一步要如何決定命運的杞人憂天想法？值此國際上，高唱檢視一國人權發展成熟高低，應從其原住民族政策之良窳來評量，衷心期望其政府民族政策對愛伊努族有些許的轉變與發展。寄情來日再踏上北海道，又見到樸質敦厚像極台灣原鄉族人面貌的愛伊努族時，驚異有新的造型與際遇。

つ優遇のネットワークを確立している。中央に原住民族専門機関が設立された後は、予算と人員が割り当てられ、中長期にわたる様々な発展計画が全面的な社会発展を目指して進められている。これらの三つの基礎は相互に作用し、台湾原住民族政策を大幅に前進させた。比べて、北海道のアイヌ族が日本に「先住民」と呼ばれることを黙って受け入れていることを思うと、自民族のアイデンティティを持つことは簡単なことではないと思わされる。特に、長い間単一民族国家という幻想を堅く信じ込んできた日本で、国内特別立法保障を打ち立て、国会議員の議席を確保し、中央に専門機関を設立するのは、現段階で言えば、困難に満ち溢れていると言わざるを得ない。

「先住民」というアイヌ民族の名称に対する疑問を抱えながら、国際会議は終了した。帰国後も長い間、彼らは次にどのように運命を決定するのだろうか、という杞憂が折につけ浮かんた。国際的には、その国の人権発展の成熟度を測るには、そこの原住民族政策の良し悪しを見ればよいと言われる。アイヌ族に対する政府の民族政策が変化し、発展することを心から期待する。いつかまた北海道の地を踏み、純朴で重厚な台湾の原住民たちによく似た面立ちのアイヌ族と再会するとき、彼らの新たなスタイルとめぐり合わせに驚くことができることを期待している。

林江義
Mayaw. Dongi